

## 留学と日中関係

### —中国人の留学とその構造変容に関する一試論—

大澤 肇



ただいまご紹介にあずかりました中部大学の  
大澤でございます。高橋先生のご配慮で、愛知大学の研究チームに参加させていただいてこの場にお

ります。高橋先生には御礼申し上げます。

実は私の専門は歴史です。特に中国の教育史、近現代史をやっております。それで、今回のシンポジウムのテーマも日中関係なものですから、教育史と日中関係、かけ合わせて、本日は少し留学に関して、簡単な報告をさせていただきますと考えております。ただ一つ問題がありまして、本日は多くの当事者、中国から留学に来ている、あるいは日本に留学して、日本に就職した人、あるいは莫邦富先生のような新華僑研究の権威になられた方もいらっしゃる、少し緊張しております。お手柔らかにお願いしたいと思います。

私は歴史学者なものですから、少し遠い100年ぐらい前から話を始めたいと思います。実は、戦前、中国から日本への留学ブームというのが2回ほどございました。1回目が1900年代です。ちょうど孫文が東京で辛亥革命をやる中国同盟会という団体を作ったのが1905年です。2回目は、1930年代から日中戦争の直前までで、実は、日本、特に東京に多くの中国人の留学生がおりました。一方、戦前、アジア太平洋戦争の勃発以前に中国からアメリカに留学していた学生もいましたが、人数的にいうと、戦前は中国からアメリカに

行った人の10倍ぐらいが日本に留学に来ておりました。ただ当時、アメリカのキリスト教の団体がやっている欧米系の大学というのも中国にはございました。

それで、話は少し飛びますが、改革開放以降になると、これが人数的にも、質的にもアメリカに行く人が主流になります。1990年代以降は、この表を見ていただければわかると思いますが、量的に拡大していったということでありまして。そこで、ここで重要な点が二点ほどございます。一点目が、民国期、あるいは1980年代に、なぜ中国から日本に留学生が来たかということです。これは先進国としての日本ということ由来ということでありまして。90年代以降、留学生の数が量的に大きく拡大したということがここで重要な二点目でありまして。

1990年代以降、中国の教育の一つ大きな変化が現れます。特に高校(高級中学)ですが、インターナショナル・バカロレア課程、いわゆる高校卒業後そのまま欧米の大学に入れるような課程が作られました。国際班あるいは国際部と言われております。上海に21校ありますが、作られたのは上海のような先進都市だけではなくありませんでした。中国の南部に広西チワン族自治区というところがあります。ベトナムと広東の間ぐらいのところだと思ってください。ここでも実は国際部がある高校が7校もあります。内陸の遅れた貧しい地域でも作られているということでありまして。

この他、欧米系の大学の現地校というのも実は今中国にあります。これは上海のあたり

ですが、ニューヨーク大学の上海校、デューク大学の昆山校—これは上海の隣になります—そういった現地校がございます。

以下では、今の中国の人たちの海外留学について、数的な面からどういう動向かということをご紹介したいと思います。資料というか、元ネタはこちらでございます。中国でおそらく最大手の海外留学予備校、新東方というところがありますが、ここが留学白書というのを出版しております。インターネットで調べれば出てきます。興味がある方はおうちに帰って見てください。これはなぜ良いかというと、サンプル数で5200あります。これだけ大規模、ビッグデータの調査資料というのはなかなかないのです。もっとも、データとしてはちょっと怪しく、社会学の先生からするとたぶん怒られそうですが、大ざっぱな傾向、「こんなものです」ということは判ります。ちゃんとした学術的な調査でビッグデータを発掘したのは、横田先生という明治大学の先生の調査があります。こちらのサンプル数は、約500です。

以上のデータをまとめたものをグラフにしたのはこちらでございます。まず、重要なのは留学希望者の所属というところでありまして、要するに、高校、あるいは中学の段階で海外に行きたいというように考えている人が約3割いるということでもあります。また、将来的に移民を考えているという、ある種、新華僑のひとつのルートが日本への留学だったということもあると思いますし、これが多いか少ないかはよくわかりませんが、現在は、移民を考えずに留学だけするという人が4割近くいるということでもあります。それから、このデータが面白いのは、留学希望者のバックグラウンドも出ているところです。この辺りで、唐先生の格差社会論にも繋がると思いますが、この留学希望者の保護者の職業階層が、普通の人というのが3割程度しかおらず、

だいたいそのお父さんお母さんが中間管理職あるいは会社の役員で、勤め先でも国有企業や事業単位など、そういった中の上、あるいは上流階級のご子息、ご息女が圧倒的であるということでもあります。それから、どういう学歴を修めたいかということであると、以前は大学院が多かったのですが、現在は学部が3割ほどに増えています。2015年のデータでは留学の若年化傾向が著しいということでもあります。そのため、日本語学校とか大学の日本語別科の役割がたぶん今後重要になってくるのではないかなというように思われます。

次に留学の目的です。新東方の調査は2013年、2015年とあります。横田先生の調査は一般の大学、留学希望者全部というのと、特にその中の日本語学科の学生を対象にした調査というのがあり、この四つを並べてみるということで見ますと、やはり、教育のレベルというのをどうも中国の若い人というのは気にするようでございます。中国の方の先行研究でも、留学のプッシュ要因として、教育レベルの内外の違いということが言われています。中国の大学は、世界のトップ100のうち、三つのみという—あまり日本人は気にしないのですが—そういうのを考慮するようです。それから、就職状況です。今、中国では、特に大卒であまり有名じゃない大学に行くとなかなか大変であるというのは、私もインタビュー調査で聞きまして、おそらくそういったことが留学をプッシュしているのではないかと思います。

なお、日本から見ると見逃してしましますが、実は、中国の若い人の圧倒的多数が、英語圏に行きたいというのが現実であります。私は少し前までハーバードにいましたが、やはり中国人が多いです。キャンパス内は中国語が飛び交っていて、僕はあまり英語ができませんが、中国語だけで何とか生き延びてきたという感じであります。今、トランプ政権

が、シリコンバレーにアジア系が多すぎるといふことで、その辺りで新しく対策を立案しようとしているぐらいです。他の先生にも聞きましたが、アジア系の学生、院生なしでは、理工系は研究が進まないということをおっしゃっておいりました。2015年の調査でも、やはり就職ということについて関心が集まっているということでありふす。

さて、スライドの最後の部分は「你はなぜ日本へ?」。どこかのテレビ番組のタイトルのパクリですが、21世紀以降、おそらく私の簡単な調査でも言えると思ひますが、日本留学の動機が変わったのではないかということだす。これは、坪谷さんという『中国21』に書かれていた横浜の先生もおっしゃっていましたが、やはり受験、あるいは就職難というのを回避するために、留学に行くということだす。日本の場合は、1980年代とか民国時期は先進国、欧米の一部として留学に来るといふことだったのが—この辺りは周先生のお話に重なると思ひますが—日本文化に興味がある、特にACG(アニメ、コミック、ゲーム)、美容、スイーツ、こういうものを学びたいから日本に行きたいということだす。実際に私が広西チワン族自治区の南寧でヒアリング調査していた時も、そういった若い人が何人もいました。京都精華大学の大学院に、マンガ研究科というところがありますが、そこもやはり多くの中国人がいるそうだす。脱線しますが、そこではドイツ人のジャクリーヌ・ベルント先生が日本語で授業をして、ドイツ人と中国人が日本語を介して日本マンガを語るという、グローバル化の興味深い状況があるそうなんだすね。

また日本留学希望者は、大都市の富裕層ではなく、ちょっとその下ぐらいの層、あるいは東北地域が多いのではないかということだす、坪井さんという駒沢の社会学の先生が書いておいりました。私は南寧と上海の国際部の話を

しましたが、その辺りだと完全に全部英語だす、東北の国際部の学校だと、日本への進学クラスというもあるらしいだす。だすので、こういった状況の中で、今後日本へ留学してくれる中国の若い人がもっと増えてくれればいいなと思ひつつ、私の報告を終わりたいと思ひます。それから、個人的な感想を少し言いたいと思ひます。やっぱり中国は広いなと思ひます。階層、上、下、地域、東北と広西チワン族自治区、都市と農村、上海、あるいは内陸部の農村では、おそらくいろいろまた違ふのではないかというように思つた次第だす。以上、時間を守つてこの辺で簡単だす報告を終わらせていただきます。ありがとうございます。